

繚  
乱

Zanka Ryoran  
Etsu Okabe

岡部えつ

残  
花





繚  
乱

Zanka Ryoran  
Etsu Okabe

岡部えつ

双葉社

残  
花

## 岡部えつ（おかべ・えつ）

1964年生まれ。大阪府生まれ、群馬県育ち。2008年に「枯骨の恋」で第三回「幽」怪談文学賞短編部門大賞を受賞し、翌年に同作を表題とした短編集「枯骨の恋」でデビュー。他の著書に『新宿遊女奇譚』『生き直し』がある。

# さん か りょう らん 残花繚乱

2014年7月20日 第1刷発行

著者 岡部えつ

発行者 赤坂了生

発行所 株式会社双葉社

〒162-8540 東京都新宿区東五軒町3番28号

電話 03-5261-4818（営業）

03-5261-4831（編集）

<http://www.futabasha.co.jp/>（双葉社の書籍・コミックが買えます）

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

落丁、乱丁の場合は送料双葉社負担でお取り替えいたします。「製作部」あてにお送りください。ただし古書店で購入したものについてはお取り替えできません。電話03-5261-4822（製作部）

定価はカバーに表示してあります。本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

© Etsu Okabe 2014

ISBN978-4-575-23871-6 C0093

目次

一	ばんざい	5
二	化生	26
三	怨婚式	44
四	十七歳	64
五	二人	83
六	散華	104
七	パートナー	123

十四	残花繚乱	241
十三	バースデー	222
十二	十八歳	197
十一	大人のルール	180
十	曲がり角	172
九	美しい玉	150
八	乳房	139

残  
花  
繚  
乱

目次

一	ばんざい	5
二	化生	26
三	怨婚式	44
四	十七歳	64
五	二人	83
六	散華	104
七	パートナー	123

十四	残花繚乱	241
十三	バースデー	222
十二	十八歳	197
十一	大人のルール	180
十	曲がり角	172
九	美しい玉	150
八	乳房	139





# 一 ばんざい

乾杯用のビールを舐めながら、西田<sup>にじだ</sup>りかはいつもの癖で、終わりについて考えていた。学生の中には卒業のことを、習いごとをすればその辞めどきを、恋愛中には別れのことを、気がつけば考えてきたように、まだ始まったもない結婚生活を想像しているうちに、ついその終わりを考えてしまっていたのだ。終わりのことを考えると、何ごとにも夢中にならずに済む。執着も生まれない。そうして気を楽にすることが、彼女の癖だった。

そして今日は、入社以来何度となく考えてきた日、りかの退職日だった。

関東一円に十八店舗を展開するホームセンターチェーンの、本社営業部企画課。りかはそこで十年間、マーケティングリサーチとセールスプロモーションの仕事に従事してきた。長く続けてきたが上を目指す気はなく、同期入社男子社員がプロジェクトを任せられる主任になっても、気にも留めず彼らの下で働いた。会社に損失を与えるような大きな失敗はしてこなかった代わりに、彼女がいなければと言われるほどの功績もない。企業にとつて自分のような人間は、いくらでも代替のきく人材であるということ、りかはよくわかっている。

そんな社員が一人、結婚を機に辞めていくだけだというのに、今夜は部署を挙げて、りかの門出を祝ってくれていた。

仲間たちがリザーブしてくれたのは、渋谷にある会社の近くに最近できた、焼鳥ダイニングだった。半地下にあるその店は、全体が白っぽく無機質な内装で、フロアの中央に設えられたオーブンキッチンには、真っ白なコックコートにチャコールグレーのタイをつけた男が三人、白く長い指で優雅に食材を捌いたり、ガラスの仕切りに囲われた炭火コンロ上の串を返したりしている。ホールには忙しなく歩き回るギャルソンが四人、給仕の間にはカウンター内でカクテルも作り、予約電話の応対もしている。いずれもタイプは違いが揃ってハンサムばかりなのは、女性をターゲットにした店作りの一環なのだろう。

「焼鳥屋っていやあ、目に沁みるような煙に煤だらけの壁、油まみれのシャツに汗を滲ませた、ねじり鉢巻の親爺がいなきやなあ」

中年上司のつまらぬ軽口に穏やかな笑みを返すほど、女子社員たちも上機嫌だ。女子会で使うとしても企んでいるのか、すでにシヨップカードを手に入れて、情報を携帯電話に打ち込んでいる者もいる。

九人が座ったりかたちのテーブルでは、ビールが終わるのを見計らってワインがサーブされ始め、主役のりかにも赤ワインが注がれた。最後の挨拶のことを考えてそれを舐める程度に飲みながら、りかはしみじみと十年という月日を思い、宴に集った同僚、上司、後輩たちの顔ひとつひとつを、思い出と重ねる。そして最後に、一人の男の顔にそっと焦点を合わせた。

白髪は混じっているが、五十を過ぎても豊かな癖のある髪、浅黒い頬、仕事中は何かを狙うようにぎらつかせているのが、オフになったとたん柔和になる目、薄い唇、厚い胸、引き締まった手首。大学時代にミスターキャンパスに選ばれたことがあるという美貌で、入社間もなく社長の

長女を射止め、同族経営であるこの会社の、常務取締役というナンバースリーの座にいる男。

「柏木常務、このたびはうちの西田が、大変お世話になりました」

企画課の課長である多野が、椅子から腰を浮かせて頭を下げる。その頭頂は四十を越えたばかりだというのに綿毛状になって浮き、テーブルには丸く膨れた腹が押しつけられている。

「いやいや、今回のことはわたしではなく、妻がね」

女子社員たちから陰でミスターと渾名あだなされている柏木は、ワイングラスを持たぬほうの手を顔の前に上げ、ほっそりした指をひらひらと振る。

「まったく、社内きつてのおしどり夫婦の常務ご夫妻に縁談を世話してもらえたとは、西田は幸せなやつです。正直、このまま売れ残ってしまうんじゃないかと、ヒヤヒヤしてましたんで」

「多野君、そういう発言はセクハラだぞ」

りかが多野を睨みつけるより先に、柏木が笑いながら言って場を和ませる。

本来であれば出席する必要のない部署の送別会に、柏木がわざわざこうして顔を出しているのは、りかの仲人であるということとを理由に、多野がごり押しごりおしの招待をしたからだ。柏木に取り入って社内で柏木一派と呼ばれているグループに入り込もうと、多野は以前から画策していた。そんなことに利用されるのはうんざりだったが、それも今日限りだと思おうとどうでもよい。

「りか先輩、いいなあ。常務う、あたしにも誰かいい人を紹介してくださあい」

りかの隣に座った後輩の小山沙月こやまさつきが、肉づきのいい腰をひねって片方の乳房をテーブルに載せるようにして身を乗り出し、端に座る柏木に向かって唇を尖らせる。同時にあたしも、あたしもと上がる声に、薄い唇を引き締めて笑いながら、柏木はちらとりかを見た。

酒がまわると、出席者たちの間で緩やかな移動が始まった。それぞれが、頃合いを見計らってりかに挨拶に来る。新人当時のりかの失敗談を蒸し返す先輩、苦勞して一緒に乗り越えた仕事の思い出話で涙ぐむ同期、夫婦のあり方について役に立ちそうもない説教をひどくさり垂れる上司。最後に柏木がゆらりと立ち上がり、通りすがりのようにりかの背後からグラスを合わせ、「幸せにね」とだけ言つて戻つていった。

りかは、首筋を冷たい風に撫でられた気がした。

「りか先輩、いよいよ来週ですね、結婚式」

沙月が、その豊かな体をりかに押しつけるように話しかけてきた。昨年新卒で入社したばかりでりかとは十近く歳が離れていたが、同じチームで仕事をするうちに馬が合い、企画の進行も組んでやるが多かった。りかの今回の退職が円滑にいったのは、彼女の仕事をそっくり引き継いでくれる、この先輩がいてくれたおかげだ。

「うん。なんだかあつという間で、まったく実感がないけど」

りかは、減っていないワインをひと口含む。

「先輩のどこ、大丈夫でした？」

「何が？」

「結婚式の準備って、大変なんでしょう。その段になつて大喧嘩して、別れたカップルがたくさんいるって、聞いたことがあるから」

「ああ、確かに」

確かに、それは大変なものだった。婚約者である圭一けいいちと二人だけでやっていたら、どうなつて

いたかわからない。

「相手のダメなところが、見えちゃうって言いますよね。男だったら頼り甲斐とかリーダーシップとか、女だったら気遣いとか従順さとか、そういうところが試されるっていうか」

「わかる気がする。でもね、うちは大丈夫」

「うわ、いきなりのろけてすか」

「違うよ。実はね、最初から彼には、その仕事を割り当ててないの」

「え？」

「今、仕事が忙しいってこともあってね、結婚式のことは、全部わたしが引き受けてるの。もちろん一人じゃ無理だから、仲のいい女友達二人に手伝ってもらって」

「なるほど。それ、いいかもしれませんね。結婚式なんて、八割がた花嫁さんのためのものだし、そんなことで喧嘩するくらいなら、一緒になんてやらないほうが、かしこいかも」

「でしょ。こういうことって、女だけでやったほうが楽しいしね。でも、最近ちょっと思うんだ。考えようによっては、結婚前に、相手の欠点をちゃんと見ておくってことも、大事かもしれないなって。そこで別れるような夫婦なら、いずれダメになるでしょ」

「ああら、もしかして先輩、何か不安なことでもあるんですか」

「まさか。幸せよ、今のところは」

「ですよ、なんたって、ミスターの肝煎りきまひなんだから」

「こら。その言い方やめてって言ったでしょ」

「すみません。でも、大学生のうちに起業した青年実業家で、ミスター夫妻のお気に入りなんて、

文句のつけようがないじゃないですか」

眉を上げて唇を突き出し、ぷつと膨らませた沙月の頬は、ほんのり赤味が差して艶々と光っている。まだ二十三歳なのだ。りかはその美しいものを、懐かしく、また少し妬ましく眺めた。

肌の美しさは、女の自信に繋がっている。衰えていくそばから別のもので穴埋めしなければ、女は自信を保っていけない。それはたとえば、結婚だ。二年前に三十を越えたとき、りかはそう思った。

「もちろん、常務には感謝してるけどね」

「いいなあ、先輩ばかり」

沙月がりかから体を離し、椅子の背もたれに寄りかかって天井を仰ぐ。りかが婚約を公表して以来、日に二度は「いいなあ」と言っている。りかは沙月の歳の頃、まだ結婚のことなど考えられなかった。

「本当にいいかどうかは、一緒に生活してみなきゃわからないかな。もしかしたら、死ぬときまでわからないかもしれない。ああ良かったこの人と一緒になって、って、死の床でそう思える夫婦って、どのくらいいるだろう」

「またあ。もうすぐ結婚式を挙げる花嫁さんが、何を言い出すんですか。あ、もしかして、マリッジブルーってやつ？」

沙月の柔らかい胸が、再びりかの二の腕に触れる。それをやんわり押し返して、

「そんなんじゃないよ。ただ、式の準備がほとんど終わったから、余計なことを考える時間ができちゃっただけ。ほら、人って、幸せ過ぎると悪いことを考えちゃうものですよ」

りかは答えた。

「んもう、結局のろけか」

「ごめん」

「先輩、そんなに幸せだと妬まれませんか、その、女友達に」

「妬まれる？」

「女同士って、仲良しの裏側で、競ったり見栄を張り合ったり、しまいには足を引つ張り合ったりするじゃないですか。あたし、最近そういうのに疲れちゃってるんです」

「そんなのは、友達って言わないよ。沙月ちゃんのお友達って、学生時代でしょう」

「ええ」

「距離が近過ぎるんだよね、学生の頃の友達は。結婚式のことを手伝ってもらってるのは、書道教室の仲間なの。月に一度、一緒に二時間お稽古して、そのあとみんなでお茶をする、そういう仲。お互いのプライベートには踏み込み過ぎず、でも同じ趣味を持っているから共有できることがある、そういう関係」

「りか先輩、書道なんてやってたんだ」

「うん。もう五年になるかな。何の気なしに始めたんだけどね」

五年前。それは二十七歳のりかが、生まれてはじめて結婚のことを考え、当時恋人だと思っていた男との結婚を、諦めたときだった。あの頃はずいぶん幼かったと、思い出すたびりかは苦笑する。諦める直前まで、男とはごく普通の恋愛感情で結ばれているのだと思いい、その未来を、子供がクリスマスプレゼントを期待するように、無邪気に信じていたのだ。今になって思えば、そ



んなことは万にひとつもあり得ないとわかるのに。

相手は、自分の社会的地位のためにもなくてはならぬ妻と、当時中学生になったばかりの娘がいた男、柏木だった。

柏木のような立場の男が、りかのような女に求めるものは何か、りかはそんなことを考えることもなく、ただ柏木に恋をしていた。いつもであればその終わりを考える時間さえ、りかは柏木に夢中になっていた。そうなることに躊躇させぬほど、柏木もまたりかに夢中だった。少なくともりかには、そう思えた。たまたま自分より先に会ってしまつた女と家庭を持つているこの男の、時間は戻せないが、未来は平等にある。その未来を今、二人で歩いてるのだとりかは信じていた。その途中で辿り着いたわかれ道で、行く先に結婚がある道へ当たり前のように足を踏み入れたとき、繋いでいた男の手がそこに打ちつけられたように動かないのを見て、りかは世界の色ががらりと変わるほどの衝撃を受けた。そこではじめて、柏木が自分に何を求めていたのかを知った。怖気おそげ立たつた。それはりかが考えていた恋の終わりや別れとは、かけ離れたものだった。自分がしていたものは、そもそも恋愛でさえなかったのだ。

しかしりかは、その手を振りほどけなかつた。引つ張られるまま引き返し、先の見えぬ道を行うことを選んだ。それまでごく普通の女として、ごく平凡な未来を夢見、折々に揺らめく感情の動きに逆らうことなく、心地よく流されて生きてきたりかが、その一瞬で重たい扉を開け、見知らぬ別世界に入った。それまで自分とは無関係だと思つていた、世間が「不倫」などという安っぽい呼称でひどくくり語るものが、にわかには自分の身の上になつたのだ。柏木の言動のいちいちが、その嫌悪に満ちた呼び名によく似合う薄っぺらなもののように思え、会うごとに自分がく